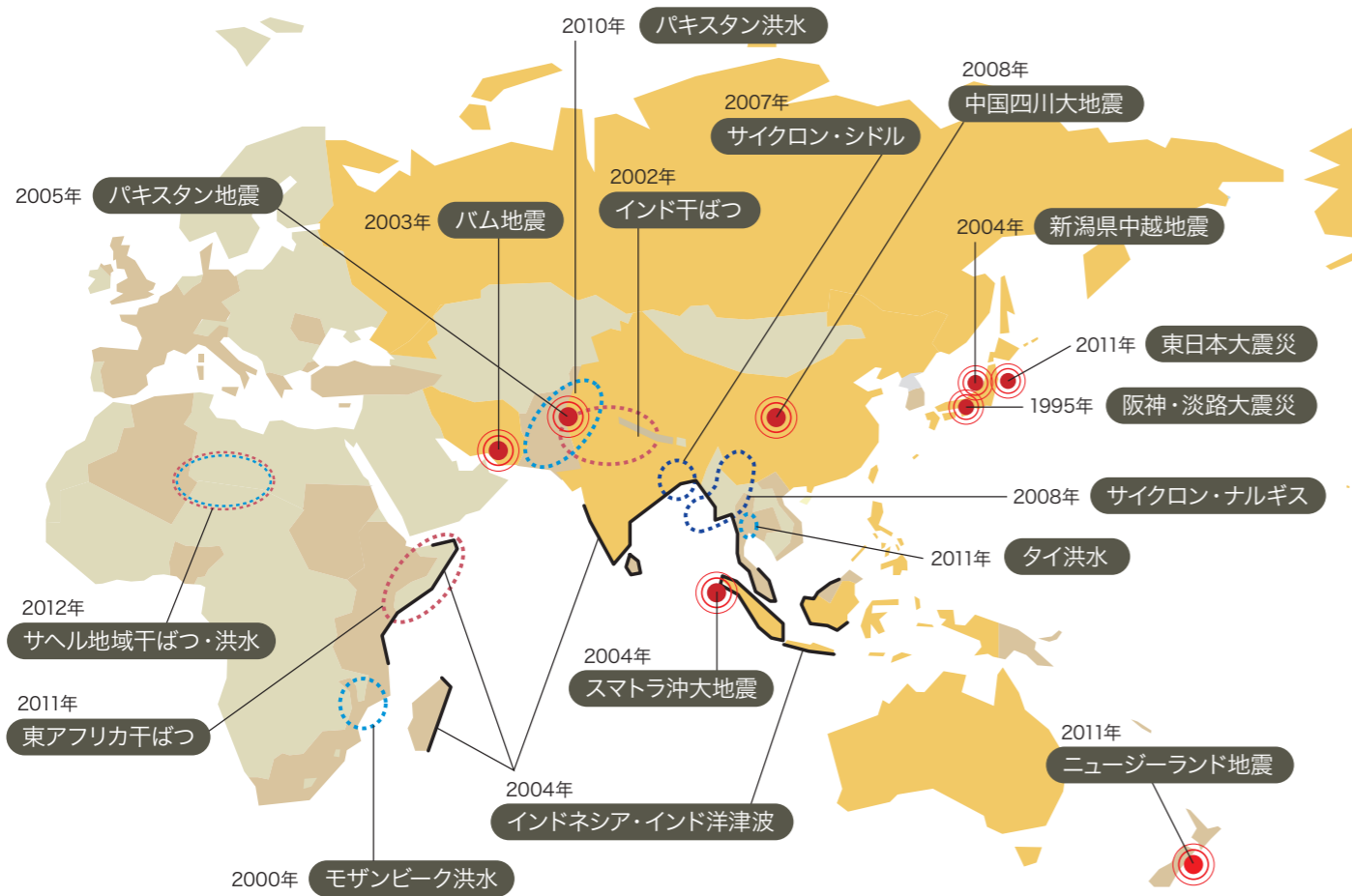




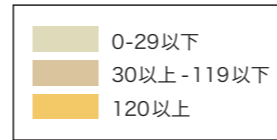
今、なぜ防災なのか

ある日突然、人々を襲う自然災害。その種類、規模は多種多様だ。台風、地震、津波などにより甚大な被害に見舞われてきた日本も、その経験を基に取り組みを進めている。

参考:「大災害に立ち向かう世界と日本-災害と国際協力」(佐伯印刷)、DRICホームページなど

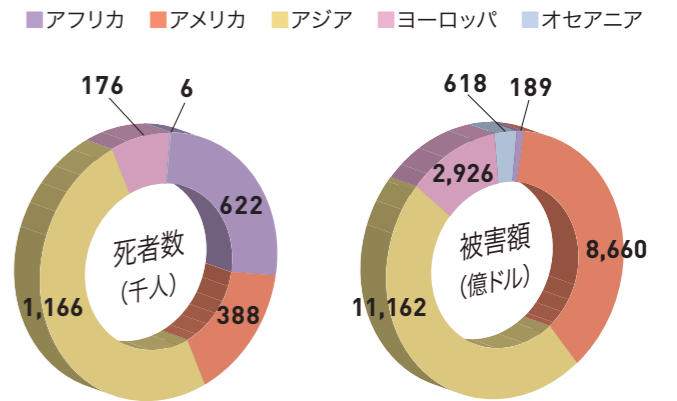


■大規模自然災害の発生件数 (1976~2005年)



2010年 チリ地震

■地域別に見た自然災害 (1983~2012年)



※行方不明者数を含む

出典: EM-DAT: The OFDA/CRED International Disaster Databaseの資料を基に内閣府作成。

自然災害の被災者は、世界で年間..... 約**1億6,000**万人

アジア地域は、死者数・被害額共に全体の..... 約**50%**



大津暢人氏

神戸市消防局 予防部 予防課 消防司令補

地域で支える防災活動

阪 神・淡路大震災の時、私はまだ就職前でした。生き埋めになった人を近所の人と助け出そうとしたのですが、「消防が来てくれるはずだから待とう」との声に押しされ、待っていました。結局消防は手が回らず、その方は亡くなってしまいました。これが、私の防災の原体験です。

神戸市では阪神・淡路大震災を教訓に、消防力の向上に取り組むことはもちろんですが、いざという時に備えて、日頃から住民と行政が協力し合い、防災や福祉関連の活動に取り組める自主防災組織「防災福祉コミュニティ」を結成しました。消火器の訓練や子どもたちへの防災教育など、各地域の特色を生かした活動が展開されています。

震災時、私たちは世界中から温かい支援と励ましを受けました。その恩返しの意味も込め、2007年から毎年、開発途上国の防災関連の行政官らを対象に、JICAの研修「コミュニティ防災(BOKOMI)」コースに協力しています。

来日したばかりの頃は、「ハードや公助を整えれば災害は防げる」との声も研修員から聞かれます。

しかし研修を通じて、これらには限界があり、自助・共助との両輪が重要なのだと感じてもらえるようです。大震災を経験した神戸市として、地域の皆さんと共に国際協力に取り組む意義を感じる瞬間です。



消防機器の使用方法について、消防署員から学ぶ研修員



阪神・淡路大震災の経験から得た教訓を伝える大津さん



吉原雅之氏

見附市企画調整課 課長補佐(防災担当)

実践的な防災対策を共有

新 潟県見附市は2004年、新潟・福島豪雨と中越地震という、2つの災害を経験しました。ここまで大きな災害を経験したことがなかったため、住民をリードするべき市職員の災害対応能力の課題がより浮き彫りとなりました。

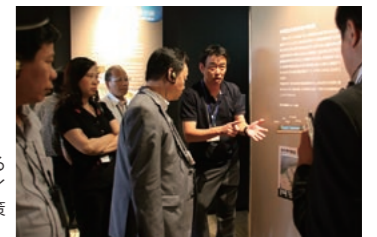
これを機に、自主防災組織の推進や、全ての市民を対象にした水害対応の防災訓練を毎年実施するなど、防災対策を徹底的に強化しました。その結果、2011年に再び豪雨に見舞われた際には、被害を大幅に軽減することができたのです。

こうしたノウハウを国際協力に生かしたいと3年前から取り組んでいるのが、姉妹都市であるブラジル・マイリンケ市でのJICA草の根技術協力事業です。ブラジルでは2011年に死者700人を超える土砂災害が起き、防災対策の強化が喫緊の課題でした。現地を訪問し、マイリンケ市には地域防災の基礎となる組織や、災害情報を住民に伝える手段がないことなどを知りました。そこで、見附市の防災対策の中から彼らでも実践可能なものをピックアップし、その一環としてポルトガル語の子ども向けの防災教材の作成な

どに取り組んでいます。日本語の「BOUSA」がブラジル国内にもさらに広まっていくよう、今後も現地の方々と協力して歩みを進めていきたいと思っています。



見附市の遊水地を視察する研修員



市役所内にある「防災アーカイブ」で防災対策について説明